The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『古今和歌集』と『新古今和歌集』の嗅覚表現の表現構造 ： 四季部における視覚との対応を中心として
Author(s)	Seo, Ye-eun
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 13-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『古今和歌集』と『新古今和歌集』の嗅覚表現の表現構造

―四季部における視覚との対応を中心として―

日本文学・日本語史学　博士前期課程1年
SEO　YE-EUN

一、はじめに

『古今和歌集』（九〇五年成立）と『新古今和歌集』（一二〇五年[1]成立）は多くの勅撰和歌集[2]の中でも特に重要に扱われた作品である。『古今集』は初めての勅撰集で、後の平安時代及びそれ以降の和歌の詠作の規範となって重視された。『新古今集』は『古今集』の古典的な歌風を継承しつつ、院政後期の美意識である幽玄と艶を幻想的・技巧的な歌風で詠じた歌集として名高い。その中でも四季部は両歌集の冒頭に置かれており、特に「花の香」は季節や景物と共に詠まれた重要な題材であった。そのため、嗅覚表現に関わる研究も多く行われた。[3]しかし、従来の嗅覚表現の研究は見立てや比喩などの表現技巧の面で論じたものが多く、嗅覚表現の詠まれ方、言い換えれば表現構造の観点から比較分析した研究は少ない。

『古今集』と『新古今集』の中でも嗅覚表現が一番多く詠まれた四季部で、嗅覚表現が使用された和歌（以下「嗅覚表現の和歌」と称する）を対象とし、両歌集での嗅覚表現の使用傾向と、視覚との対応を中心とした表現構造を分析する。本発表では『古今集』の時代以降、すでに「香」の代表的な詠まれ方として定着したと考えられる「袖の香」・「移り香」ではなく、『古今集』でよくみられる「嗅覚と視覚的な要素が対応して嗅覚を強調する構造」（以下、発表者は「嗅覚―視覚の対応構造」[4]と称する）を中心に、『古今集』と『新古今集』の嗅覚表現の和歌を分析・比較する。

本発表では「嗅覚―視覚の対応構造」を中心として『古今集』と『新古今集』の四季部での嗅覚表現の和歌を検討し、視覚と関わりのある用例の特徴を明らかにすることを目的とする。

二、和歌における「香」

嗅覚表現は『古今集』の春の部で特に重要に扱われた感覚である。これは、平安時代の貴族の「香」に対する意識と、「薫物」に関わる固有の文化に基づいている。平安時

---

[1] 第一類の竟宴本の成立、精選歌の部類時代を基準とする（一二〇四年～一二〇五年）
[2] 天皇の命令により公的に編纂された和歌集を称する。
[3] 代表的な研究に、三木雅博「〈香〉と視覚―古今集前夜における詩と歌の交感―」（『文学』5、二〇〇四）、宇佐美喜三八「梅が香―古今集の梅花の歌に関して―」（『語文』24，一九六一年）、上野理「花と香と歌―古今集論考説―」（『文芸と批評』1，一九六三年）をあげられる。
[4] 【対応】：ある一つの物事が、他の種類、範疇の物事に対して、対立、上位・下位、併列などの関係にあること。（『日本国語大辞典』）

代の貴族には「薫物」を着物に焚き染める文化があった。袖から匂う薫香は、その人の個性と気品を表すものでもあった。このような「薫物」の文化により、「袖の香」は必然的に和歌の重要な題材となった。「花の香」が懐かしい人の「袖の香」を思い出させる内容と、花や他の人の袖から自分の袖や衣に香が移されたという「移り香」の内容は『古今集』の時代にはすでに定着しており、『新古今集』での用例は一九首の中九首で、凡そ半分を占める。特に春の「花の香」といえば「梅の香」が代表的であり、「梅の香」に関わる「袖の香」・「移り香」として有名な歌に『古今集』の三二番歌[5]がある。

題しらず　　（古今・春歌上・三二・よみ人しらず）

折りつれば袖こそにほへ梅花有りとやここにうぐひすのなく

（訳）：花を折ったのだから、私の袖に匂いが移ってしまったのだが、花があるわけでもないのに、梅の花がここにあるのかと思って、鶯が鳴きにくるよ。

「梅」に「袖」が触れたもので、「梅」から「袖」に香りが移ったように表現している。上記のような、「香」の【「袖」→「花」】・【「花」→「袖」】の移動が表している構造は『古今集』の代表的な表現構造であり、『新古今集』に至ってはすでに嗅覚の詠まれ方として定着されたともいえる。

上記の「袖の香」・「移り香」以外、視覚的な要素と嗅覚的な要素が関わる構造も特徴的である。歌の主な題材となる景物の嗅覚、視覚的な特性に基づいて、景物に対する嗅覚と視覚的な面を比較・対照させる構造となっている。以下、『古今集』の四季部での嗅覚表現の使用傾向を分析することをはじめとして、「嗅覚―視覚対応構造」をより詳細に分析し、『新古今集』の嗅覚表現の和歌を検討していく。

三、『古今集』と『新古今集』での嗅覚表現の使用傾向

『古今集』の四季部における嗅覚表現の和歌は全二六首で、その中「か（香）」の用例が二〇首で一番多く、「にほひ・にほふ（活用形を含む）」の用例が九首で二番目に多く使われた。[6]『新古今集』の四季部での嗅覚表現の和歌は全一九首で、『古今集』と同じ傾向がみられる。最も多く使用された嗅覚表現は一二首の「か（香）」であり、「にほひ・にほふ」の用例が二番目に多く、一〇首確認できる。

『古今集』で「か（香）」と「にほひ・にほふ」が一首の中で共に詠まれている用例は四首（四二、二四〇、二四一、三三五番歌）で、『新古今集』では三首（四三、二四五、二四六番歌）みられる。上記の表現以外では「かをる」・「かぐ（嗅ぐ）」・「いろか（色香）」がある。

---

[5] 和歌はすべて『新編国歌大観』（日本文学web図書館）、（訳）は『新編日本古典文学全集』（小学館）から引用した。

『新古今和歌集』の場合は切出し歌（後に後鳥羽院によって削除された歌）も含めて分析し、今回の論考では「本歌取り」における影響は後の課題として扱うことにした。

[6] 一首で二つ以上の表現が使用された場合は、表現ごとに別々に扱って数えた。（「香」と「にほふ」が両方使用された歌は、表現ごと一回ずつ、総二回重複に数える。）

「か（香）」は花、特に「梅」と一緒に詠まれる用例の大部分を占めていて、『古今集』の春歌の用例一九首から四首（花一首、桜一首、山吹の花二首）を除外すると、残りの一四首すべてが「梅の香」を詠んだ歌である。『新古今集』の春の部立てでも、種類を特定できない「花」四首を除けば、全一一首の中、七首が「梅の香」の用例である。

『古今集』と『新古今集』の四季部での嗅覚表現の使用語や使用数を検討した結果、嗅覚表現の和歌の用例数や、嗅覚を表す歌ことばの使用傾向には大きな違いはなかった。それでは、その表現構造にも類似性がみえるのだろうか。視覚との対応が目立つ用例を中心として『古今集』と『新古今集』の四季部の嗅覚表現の和歌の構造を分析してみる。

四、「嗅覚―視覚の対応構造」

「嗅覚―視覚対応構造」は二章で説明した「袖の香」・「移り香」と共に、『古今集』の嗅覚表現の和歌の用例として非常に特徴的な表現構造である。

最初に「嗅覚―視覚対応構造」を明確に説明する。「嗅覚―視覚対応構造」とは、和歌の中で視覚的な状況や要素と嗅覚的な特性を対応させる構造である。視覚との対比点・類似性（特に色）・特別な視覚的な状況（見えない状態）等を先に提示し、嗅覚的な特性を取り上げることで、嗅覚（香）を強調する構造である。「嗅覚―視覚対応構造」の重要な特徴は「視覚の要素と直接対応する嗅覚」と「嗅覚の強調」である。上記の点が視覚的な要素と嗅覚表現が単純に羅列されている構造とは区別できる点である。

「嗅覚―視覚対応構造」は大きく二つに分類できる。一つ目は景物の視覚的な類似性に基づく場合で、**（ア）視覚的な類似性による識別不可能性を呈し、嗅覚的な特性を識別の手がかりとして提示することで嗅覚を強調する構造（視覚的な類似性）**である。二つ目は、周りが暗くて景物が見えない状態であるが、嗅覚（香）を通じて景物を探せる場合の、**（イ）視覚の遮断によって嗅覚が強調される構造（視覚の排除）**である。

以下は、詳細分類別の代表的な用例である。

（ア）視覚的な類似性

梅花にゆきのふれるをよめる　（古今・冬歌・三三五・小野たかむらの朝臣）

花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく

（訳）：白い色が雪と混じり合って花が見えなくても、せめて香りなりとも放ってくれ。花のあることが誰にでも分かるように。

（イ）視覚の排除

はるのよ梅花をよめる　（古今・春歌上・四一・みつね）

春の夜の**やみ**はあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる

（訳）：春の夜の闇は理屈に合わずわけが分らないよ。暗闇に咲く梅の花はたしかにその色は全くみ見えないが、香りは隠しようもないではないか。だからそのありかはすぐ分かるよ。

「白い色」という梅と雪の視覚的な類似性と、「梅の香」という嗅覚的な特徴と対応させる用例や、「闇」・「月」等における特定の視覚的な状況と「香」という嗅覚的な性質を対応させる表現構造は、どちらも香ばしい「香」を強調する効果をもたらす。

『新古今集』では嗅覚表現と視覚的な要素との関わりのある用例五首の中、「嗅覚―視覚対応構造」の用例は六八四番の一首しか存在しない。

千五百番歌合に　　（新古今・冬歌・六八四・右衛門督通具）

くさも木もふりまがへたる雪もよに春まつ梅の花のかぞする

（訳）：草も木も見分けにくいようにして雪の降る中に、春を待って咲く梅の花の香が漂うことだ。

他の四首（四〇、四四、四五、四六番）は「月」や「影」が「梅」と一緒に詠まれたという共通点はあるが、視覚との関係性を中心に構造上の類似性を見出すことは難しい。

五、『古今集』と『新古今集』の「嗅覚―視覚対応構造」比較

『古今集』では、視覚的に区別できない状態を想定し「香」で区別して「香」を強調・賛美する形の（ア）と（イ）の構造が過半数を占めるものの、『新古今集』では（ア）の用例だけ一首確認できる。また、『新古今集』では、視覚と関りのある用例五首の中「嗅覚―視覚対応構造」の歌は六八四番の一例しかない。

まとめると、『新古今集』で「嗅覚―視覚対応構造」の用例はあるが、それは全一九首の中一首だけで、『古今集』の用例に比べると非常に少ない。従って、「嗅覚―視覚対応構造」は『古今集』の特徴的な表現構造であり、嗅覚表現の和歌の詠まれ方として定着せず、『新古今集』まで継承されなかったと考えられる。

六、おわりに

本発表では『古今和歌集』と『新古今和歌集』の四季部における嗅覚表現の使用傾向を検討したうえで、視覚的な要素との対応関係に注目して考察した。嗅覚表現の使用傾向としては両歌集とも「か（香）」の用例が一番多く、次は「にほひ・にほふ」の用例であって、使われた表現の種類や嗅覚表現の数自体は大きな違いを見せなかった。

『古今集』の嗅覚表現の和歌では「表現の方法」に重点が置かれており「表現構造」にある程度類似性があって、表現構造上の特徴が明確であった。特に、『古今集』では視覚的な特性を先に提示し、嗅覚と対応させることで嗅覚を強調する「嗅覚―視覚対応構造」が目立った。それと比較すると、『新古今集』では「袖の香」・「移り香」と六八四番以外、表現構造の面で類似性をみせる用例がなかった。しかし、『新古今集』では「嗅覚―視覚対応構造」の用例が一首しかなく、「嗅覚―視覚対応構造」は『新古今集』で嗅覚表現の典型的な詠まれ方として定着、継承されなかったことを確認できた。